



第 27 号
2022.3

青少年赤十字

賛助 ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

- 1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
- 1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
- 1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団 〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
 事務局 日本赤十字社広島県支部 TEL (082) 545-5011

青少年赤十字の活躍に寄せて 広島県教育委員会教育長 平川 理恵



新型コロナウイルス感染症への対応に携わっておられる医療従事者の皆様をはじめ、社会活動を支えていただいている皆様に、心から敬意と感謝の意を表します。

日本赤十字社におかれましても、全国の赤十字病院を中心に新型コロナウイルス感染症の治療や感染拡大防止のための活動等に取り組みられていますことに感謝申し上げます。

さて、第一次大戦中、アメリカやカナダなどの子供たちが、赤十字社を通じてヨーロッパの戦場となっている地域の子供たちへ文具や手紙を送ったことがきっかけで発足された青少年赤十字は、これまで長年にわたり、児童生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活での実践活動を通じて、いのちと健康を大切に、地域社会や世界のために奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育成することを目的として様々な活動を展開されてきました。

そして、この令和4年（2022）に創立100周年を迎えられました。改めてここに、青少年赤十字によるこれまでの御功績に敬意を表すとともに、今後の益々の御発展を祈念いたします。

この創設100周年を記念する特別事業として、令和4年1月から令和5年3月まで、児童生徒のより一層の健康と安全、そして国際理解を深めるとともに、人類社会に対する奉仕の精神を育成することを目的に「100万羽おりづるプロジェクト」が展

開されます。プロジェクトでは、世界中の子供たちが学校に通い、教育が受けられるようにという願いを込めて100万羽のおりづるを製作し、参加者が、仲間と協力し合い、課題を解決し目標を達成することの大切さを学ぶとともに、この活動を広くPRするため「ひとつの大きなレイ」に繋ぐというギネス世界記録へ挑戦されます。ギネス記録への挑戦後は、「おりづる再生プロジェクト」として、おりづるを解体してノートなどの文具に再生し、貧困問題を抱える国の子供たちに届ける活動も計画されています。

本プロジェクトにおいても、誰の心の中にも本来ある「やさしさ」や「思いやり」の心を引き出し、主体的に行動できる児童生徒の育成に多大なる御尽力をいただいております。

県教育委員会におきましても、「広島で学んで良かった」と思える 広島で学んでみたいと思われる 日本一の教育の実現」を目指し、学んだ知識を活用して、他の人と協働して課題を解決する力を育むことを重視した「主体的な学び」を促す教育活動の充実に取り組んでいます。

青少年赤十字加盟校の児童生徒は、100周年特別事業はもちろんのこと、日常的にボランティア活動や国際交流などに取り組み、その中で、課題に「気付き」、課題解決の道筋を主体的に「考え」、仲間と協力して一歩ずつ「実行する」ことを学んでおり、このことは広島県が推進している「主体的な学び」と軌を一にするものです。これからも、「気付き、考え、実行する」力を自分たちの生活の中でも生かしながら、周りの人々と共に生きることのできる青少年の育成に取り組んでいただきたいと思います。

ます。
この度、創立100周年を迎えられた青少年赤十字の更なる発展と加盟校の広がりに向け、皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

青少年赤十字創設100周年を迎えて

日本赤十字社広島県支部事務局長

泉水 直



賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

2020年からの新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、人との接触を極力避ける生活様式の中で、学校の外で集まり、共に活動する機会が失われることが多くなりました。

しかしながら、こうした状況下においても青少年赤十字加盟校では、児童・生徒自ら、自分たちに何かできることはないかを考え、「人間の命を救いたい」、「困っている人を助きたい」という人道の精神のもと、医療従事者への応援メッセージの送付や、感染対策を徹底したうえで献血の呼びかけなどを行って下さいました。

また、ここ数年、7〜8月にかけて毎年のように豪雨災害が日本列島各地を襲っていますが、これらにつきましても、いち早く募金活動を行っていただ

いている加盟校もあります。こうした活動も、ひとえに賛助奉仕団や指導者の先生方の平素からのご指導の賜物と感じている次第です。改めて指導者の皆様に感謝申し上げます。

さて、日本における青少年赤十字は、1922年に滋賀県の守山市立守山小学校で誕生し、今年（2022）で創設100周年を迎えます。これを記念し広島県支部では、青少年赤十字広島県指導者協議会と共催で、園児・児童・生徒の国際理解を深めるとともに人類社会に対する奉仕の精神を育成する目的で、県内加盟校などが参加して100万羽のおりづる制作を行い、おりづるを繋げた長さのギネス世界記録に挑戦する「100万羽おりづるプロジェクト」を実施します。

また、ギネス挑戦後には、おりづるを解体した折り紙で、世界の子どもたちに向けたメッセージ付きの「おりづる再生紙ノート」を制作し、ネパールの子どもたちに届けることとしています。

コロナ禍の今こそ、青少年赤十字の活動を通して、人の苦しみや痛みを「気づき」、同じ人間としてどうすればよいかを「考え」、自分にできることを勇氣をもって行動する「実行の人」として、是非とも成長してほしいと願っています。

青少年赤十字の活動期間は決して長くはありませんが、優しさや思いやりといった根柢の部分は、皆さんが今後生きていく上での大きな糧となるものとして信じています。広島県支部としても賛助奉仕団の皆様と手を携えて、青少年の育成を全力で支援して参ります。今後とも、青少年赤十字活動のさらなる飛躍に向け、皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

青少年赤十字の一層の発展を願って 広島青少年赤十字賛助奉仕団

委員長 日高敬司



新型コロナウイルスによる昨年・今年と2年連続で社会生活は大変混乱しております。

そのため、教育活動も大幅に制限されています。流行は高止まりした形で来年度も引き続き影響を及ぼしそうです。そのような状況の中にあっても学校では蔓延防止に努めながら、青少年赤十字活動をすすめていただいています。

そこで、賛助奉仕団として、いくつかの提案をしたいと考えます。

第1は、オンラインネットワークの活用です。

今号の報告にもありますように、小学校、高等学校、指導者トレセンがオンラインで開催されました。今や小学生から高校生まで全員にタブレット端末を配布する時代ですので違和感はありません。逆に言えば大いに利用して知見を広げるときがきたともいえます。そこで、JRC活動に利用したらと考えます。

① 他県のJRCクラブとのオンライン交流

例えば、スタディセンターで出会った友人の学校同士がオンラインで交流する。中四国ブロック指導者協議会・賛助奉仕団協議会などの連携による学校のマッチングをするなど。

② 卒業生と在校生とのオンライン交流

現在コロナ禍にあつて卒業生も母校に行くのも遠慮がちになります。しかし、オンラインであれば場所と時間を問わずにできることです。

③ 海外の学校とのオンライン交流

これは日本赤十字社から紹介していただくことになりませんが、海外交流はより幅広いものが得られるものと考えます。昨年は「青少年赤十字国際大会」に舟入高校の生徒の皆さんが参加しています。いまや英語は小学校から学習することとなりました。学校で学ぶ英語はともすると「ためにする」学習におわりがちです。海外の学校と交流できれば、一石二鳥の効果があると考えられます。たとえ母語が英語でなくても、英語は国際的に通用する言葉であるし、少なくとも日本よりずっと上手であると言われています。

第2は、教材づくりです。

日本は災害列島と申しても不思議ではありません。地震・台風など大きな災害が毎年必ずやってきます。広島県でも平成28年から毎年のように災害が起き、児童生徒に被害が出ています。市役所・役場にはその被害のまとめがあるはずですが、学校にも避難訓練等で浸透しているかと考えます。しかし、これは教材化されていないので、使いにくいものです。

① 広島県の直近の災害の教材化

これを作るためにはプロジェクトチームを結成して取りかかる必要があります。これには、指導者協議会・賛助奉仕団・支部、また、県庁や市・町との連携が必要かも分かりません。子どもを災害から守るためには避けては通れないものであると確信しています。

② 赤十字及び青少年赤十字の教材づくり

現在、日本赤十字社にある教材は印刷したものしかなく、DVDやパワーポイント化したものはありません。いまや世の中はコンピュータの時代

です。視聴覚教材が現代の子どもたちにはより有効です。

第3は地域奉仕団との連携です。

今号の「府中町防災研究会赤十字奉仕団」は積極的に学校での防災教育に援助していただいています。前号の第26号では三次市三和赤十字奉仕団、また、第25号では呉市赤十字奉仕団が連携を載せていただいています。同様に25号にて東広島市赤十字奉仕団が学校と連携して市文化祭に展示をされたことの報告があります。そして、熊野町は町をあげて「赤十字祭り」の催しを行っておられます。これらは地域と学校が結びつき、災害・防犯などに多大の成果をあげておられます。これに関しての提案をいたします。

① 地域奉仕団と賛助奉仕団と連携して学校訪問し赤十字の勧誘をする。

② 教育に地域奉仕団が持つノウハウを活用できるようにカップリングの援助をする。

③ 市・町の文化祭に地域奉仕団が赤十字の展示を行って貰うようお願いする。

(実践報告)

幼稚園におけるJRC活動について

社学校法人田口学園 ちどり幼稚園

教諭 吉田邦子



○本園の取り組み

ちどり幼稚園は「「気づき・考え・実行」できる園児の育成」を

教育目標に掲げています。令和3年度の取り組みと

して、挨拶運動の実施、そして令和元年度から行っている、子どもたちの心と身体を鍛える「体力づくり」を行いました。

○挨拶ができる子どもに

今年度はまず挨拶カードを作り、「子どもたちが職員に挨拶をしたらカードがもらえる」というルールを作りました。そこで子どもたちは保育者だけではなく、事務の先生や、バスの運転手さんなどいろいろな方へ挨拶をするようになりました。挨拶を通して人との関わりが生まれ、職員と子どもがお互いに名前呼び合う温かい雰囲気が生まれました。



あいさつバッジ

子どもたちの挨拶の習慣もついてきたので、今度は「素敵な挨拶をしたお友だちひとりに職員がバッジを渡す」という内容に変えていき、ただ挨拶をする

のではなく、立ち止まったり、目を合わせたり、お辞儀をしたりと心のこもった挨拶ができるようになってきました。主に年長の子どもたちが取り組んでいるのですが、その姿を見ている年中や年少の子どもたちも真似をして進んで挨拶をするようになりました。大人が何も言わなくても子どもたちは自分の目で見て、気づき、考え、行動できるのだと実感した出来事でした。

挨拶は人との関わりの中でなくてはならないものです。引き続き子どもたちの成長を見守っていききたいと思います。

○心も身体も強い子どもを目指して

「運動大好きちどりっ子」をテーマに年間計画に基づいて「体力づくり」を各学年取り組んでいます。「走る・跳ぶ・投げる・ぶらさがる」の4種目の動きを様々な遊びを通して身に付けていきます。鬼ごっこやなわとび、紙飛行機とばしやタオル綱引き、サーキット運動などしっかり遊んでいきながら、体力をつけている子どもたち。遊んでいく中で、「どうしたらもっと早く走れるかな」「どうしてお友だちは遠くまで投げることができるんだろう」と考える姿も見られるようになりました。そういった疑問はクラスや学年で一緒になって考えていき、コツを見つけていきます。そして繰り返しチャレンジ！毎月行う測定でも着実に体力がついていることが記録として表れています。また、取り組んでいく中で、諦めずに挑戦したり、目標に達したときに思いきり喜んで、うまく出来なくて涙が出たり、友だちの姿に「すごい！」と拍手が起こったり：達成感や時には悔しさ、また友だちを応援する気持ち、友だちからの励まし、などいろいろな思いを子どもたちは感じ

ているようです。そういった姿から心の成長も感じ取ることができています。

○さいごに

子どもたちが挨拶運動や体力づくりなどのいろいろな場面で「気づき・考え・実行する」力を発揮していることを日々の保育を通して実感しています。大人になっても必要なこの力、しっかり伸ばしていきたいと思います。

本校のJRC活動について

神石郡神石高原町立来見小学校

養護教諭 森岡 絵美

本校は神石高原町の東南端、標高570mの高原に位置する全校児童70名の小規模校です。



高原ゆえの自然環境に恵まれており、四季折々の草花や野鳥に

囲まれ、校舎から見える夕日も格別です。特に、夏季は爽やかな風が吹きぬけ、とても過ごしやすいです。星の観測にも大変適しており、校舎屋上には県内でも珍しい天体ドームがあります。

本校はJRC加盟校として14年目を迎え、その時々で、様々な青少年赤十字活動に取り組んできました。これまでの活動としては、日本赤十字社広島県支部の方を講師としたJRCの理解を深めるための俳画教室、児童会を中心に行った募金活動、社会奉仕と地域連帯の精神を高めるための点字・車いす・盲導犬・高齢者体験学習会やペットボトルキャップ集め、学級園や学校花壇の充実を図った緑化活動、花の種・花の苗配布活動、地域の安心安全に対する意識の高

揚を図るための児童手作り看板の国道への設置や児童会によるあいさつ運動などです。



俳画教室

また、町内養護教諭研修会でも指導員派遣制度を活用しています。これまでに、日本赤十字社指導員を講師とした「『保健室における救急処置の事例から学ぶ』」養護教諭の専門性を生かした救急処置活動や、日本赤十字社広島県支部の方を講師とした教職員の救命救急講習会を行いました。

本校における花壇整備では、油木高等学校の生徒や地域の女性部の方と連携して、パンジー、サルビア、コスモス、ひまわり等、季節の花を植えたり、環境美化委員会活動や児童ボランティアを募集して草取りをしたりしています。花の植え方や育て方の指導を受けたことをきっかけに、児童の栽培活動に対する関心も高まり、1年を通して花いっぱい美

しい学校環境を整え、維持することができています。また、日常的に行うあいさつ運動、縦割り班による清掃活動や児童委員会活動は、JRCの理念の「気づき・考え・実行する」ことを意識して毎月振り返りを行うことでリーダー育成の場にもなるなど、よりよい活動になっています。



花壇の手入れ

昨今のコロナ禍においては、日本赤十字社作成の「新型コロナウイルスの三つの顔を知ろう！〜負のスパイラスを断ち切るために〜」を活用した一斉学級指導の実施や「新型コロナウイルス『STOP! 誹謗中傷アクション』」シトラスリボン運動を行いました。

今後も、赤十字の精神に基づき、日常生活の中での実践を通じて、「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」の三つの実践目標達成のために、子ども達とともにJRC活動の活性化を図っていききたいと思っております。



「シトラスリボン運動」意見のまとめ

青少年赤十字の教育理念を育む学校・社会

広島県青少年赤十字指導者協議会長
 広島市立三和中学校長 三宅 徹



この2年間、新型コロナウイルス感染症の影響により、私たちの日常生活も、各園や学校での生活も、多くの制約

を受けて来ました。園や学校の行事や部活動、青少年赤十字の活動など、子供たちが主体となる様々な活動は、同じ目的を持つ者同士が集まる形で展開できず、どこことなく寂しい日々が続きました。そのような状況下でも、様々な工夫により、何とか子供たちのモチベーションを保ちながら、集団の質を高める努力が続けて来られました。

青少年赤十字の活動も、新たなコミュニケーション技術としてのオンラインツールを活用することにより、各園や学校の実践を紹介し合い、繋がりを強化し、活動の裾野を広げたり、その教育理念を根付かせたりすることが目指されています。それぞれの教育現場には、子供たちの素晴らしい実践と、それにより形成された子供たちの素敵な姿がたくさんあると思います。



校門前坂道での挨拶ボランティア

私の勤務校でも、子供たちが生徒会活動として主体的に取り組んでいるボランティア活動があります。定期的に登校時に行われる「あいさつボランティア」、校内の花壇やプランターに花苗などを植える「緑化ボランティア」、校舎内外の汚れやすい所や普段手が回らない所をきれいにする「清掃ボランティア」などです。



緑化ボランティアの活躍

本校の生徒会スローガンは「進取果敢」という言葉です。これには、「進んで積極的に行動・発言できるボランティア精神あふれる学校にしたい。そして、生徒一人一人が正しい判断・決断をできるようにしたい。」という思いを込めたと、スローガンを

考案した生徒会執行部が、生徒総会で全校生徒に訴えていました。その呼びかけに応えるように、様々なボランティア活動に、いつも多くの生徒が積極的に参加しています。

主体的に活動する子供たち、「気づき、考え、実行できる」子供たちの力は強くて大きいです。私の勤務校は学校規模も大きいので、生徒たちの力が結集されると効力は絶大です。来校される方々から、「生徒のみなさんが、よくあいさつをしてくれませぬ。」とか、「掃除が行き届いていますね。」と、子供たちの自己肯定感を高められる言葉をいただけることがあります。子供たちは、ますます頑張ることができ、さらに成長していきます。



「清掃ボランティア」による日頃は目につかないところの掃除

実は、こういった成果は、子供たちの努力だけで生み出されたものではありません。本校は歴史のある学校で、長年、学校を見守り支えて来られた地域の方が大勢おられます。また、歴史が古いだけに、本校の卒業生である保護者の方も多いようです。そんな地域の学校、母校に愛着を持ってもらえる方が学校のため子供たちの健全な成長のために、愛情を注いでおられるのです。かつては、荒れている時期もありました。地域の方々は、ずっと見守り、あいさつの声かけを続けられました。休みの日、部活動を見に来られた保護者の方々が子供たちと一緒に校内の掃除をしてくださいました。こういった身近な大人たちの愛情を感じたり、姿を見たりして、子供たちは「気づき、考えた」ことを「実行に移す」ようになるのではないのでしょうか。学校での実践と地域の支援によって、子供たちに、青少年赤十字の教育理念を育んでまいりましょう。

最後に、話は変わりますが、私はよく、著名人の話題を教材として子供たちに伝えます。アメリカメジャーリーグにおいて、二刀流で大活躍中の大谷翔平選手を取り上げたこともあります。彼が、全米に認められ、野球に詳しくない人までも熱狂させるようになったのはなぜでしょう。私は、チームメイトはもちろん、相手選手、審判、マスコミ、ファンなど誰に対しても思いやりあふれる彼の立ち居振る舞い、決して誰も傷つけないその人間性が影響していると思います。この人間力は、スポーツ界や国境を越える普遍的な力があると思います。青少年赤十字が百周年を迎えるにあたり、このような人間力で世界がつながり合えることを期待し、話を結びたいと思います。

令和3・4年度青少年赤十字研究推進指定校（中間 報告） 安芸郡府中町立府中中学校長 小山貴美



府中町立府中中学校は青少年赤十字加盟の歴史が最も長い学校の一つであり、開校以来青少年赤十字の理念を受け継ぎ、生徒会活動を中心に「気付き、考え、行動する」JRC活動に取り組んできました。JRC活動は、「命と健康を大切に、地域社会に奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育む」ことを目的とする実践的な活動です。昨年度は、生徒全員の救急蘇生法学習やコロナ禍の医療従事者の方々への感謝募金活動などに取り組みました。学校教育目標「人間（じんかん）に学び合い、『志』をもって生きる生徒の育成」のもと、めざす「自他を大切に多様な人とつながる共生」と「社会とつながる貢献」を青少年赤十字の理念と重ね、今年度より指定校として研究推進を行いました。

①「自ら行動する力」を育成する生徒会活動

生徒会活動として、生徒会各委員会が課題を解決しよりよい学校づくりのために、今できることは何かを考え、活動を計画実行しています。学級委員会では、毎月一回、朝のあいさつ運動をPTAや地域の協力もいただき行っています。自らあいさつできる人になることを目標にしています。美化委員は花の水やりや中庭のプランター花言葉づくり、体育委員は運動のためのボール貸出、図書委員会の「図書室へ行こう」キャンペーンなど、生徒が自ら行動する力をつける

活動をしています。コロナ禍により校外で交流するボランティア活動に十分に取り組めなくなりましたが、花壇の植え替えや校庭の雑草除去の環境整備など、個人や部活動でボランティア参加がありました。生徒会の地域貢献として、消毒用アルコールボトルカバーをボランティア募集して制作しています。地域の幼稚園や保育園に贈り、進んで消毒し感染対策の推進に役立ててもらいたいと考えました。地域・学校・保護者のつながりを大切にしながら、「自ら行動する」生徒会活動をしています。



消毒用アルコール・ボトルカバー

②青少年赤十字プログラムを取り入れた地域支援者となる防災学習

本校では、これまでも防災学習に取り組んできましたが、青少年赤十字防災教育プログラムを取り入れ、防災に関する学習の関連づけをすることで内容の充実を図りました。1年生はプログラム「みんなで行こう」の学習を、「3・11を学びにかえる」の講演会、災害対応食である救給カレーの実食、予

告なしの避難訓練と関連づけて実施しました。「みんなで行こう」では様々な立場に立ち、限られた食料をどのように分ければよいのかを考えました。その中で、「食料は限られており、一つでも無駄にすることはできない。」などの感想が見られ、避難時の危機を実感していました。また、温めることなく本物の体験をした救給カレーの実食では、「これが避難先だったら」と考えて食べる生徒が多かったです。これらの実際の状況を想定する経験が、地域支援者として「気付き、考え、行動する」力につながると思います。



救給カレーの実食

③地域貢献をめざす探究的な学習「椿」プロジェクト

今年度は、「総合的な学習の時間」が探究的な学びになるように、単元開発に取り組みました。第1

学年では、防災教育をテーマに「リアル避難所」という単元を設定し、災害が起こった時に避難する避難所を学校に設置することを想定し、生徒が実際に避難所を運営者になる活動と避難所において様々な家族が生活をするという避難者になる活動を仕組みます。避難所を設置するためには、何をどれだけ準備すればいいのか、避難者にはどのような要求があるのか「気付き、考え、行動する」ことができればと考えています。この学習において、「守られる防災」から「守る防災」をテーマとし、地域への「貢献」を行っていくための方法を考えていきたいと考えています。体験活動は3月に実施予定で、現在、実施に向けて、準備を進めています。



防災グループ学習

地域とつながり「共生」と「貢献」をめざすこれらの活動を通して、生徒の主眼的に行動する力と地域の支援者としての自己有用感の向上を図り、学校

としての社会貢献を果たしていきたいと考えています。

本校の青少年赤十字活動について

〈文房具回収ボランティアを通して〉

呉市立仁方中学校 教諭 中川雄貴



まず初めに、昨年の11月末に開催された青少年赤十字広島県大会においては、継続加盟5年の表彰をして頂き、ありがとうございました。生徒

会を中心としたJRC活動の充実を、より一層図っていききたい所存です。

さて、呉市立仁方中学校では、JRCに加盟して以来「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」という3つの態度目標を達成するための活動に力を入れてきました。しかしながら、昨今の新型コロナウイルス感染症の流行によって、これまで行うことが出来た活動にも制限がかかり、思うように取り組むことが出来ない現状があります。今回は昨年度行った活動ではありますが、「奉仕」と「国際理解・親善」を兼ねた「文房具回収ボランティア」の取り組みについて、紹介させて頂きます。

このボランティアが始まるきっかけとなったのは、2020年12月の代議員会でした。当時本校では、ボランティア活動を企画・実行する委員会を代議員会に位置づけていました。その代議員会において、今月のボランティア活動を企画する話し合いを行う中で、「12月のクリスマスにちなんで、何かで困っている人たちに必要なものを送りたい」という意見

が出ました。その意見をもとに、代議員がインターネットで仁方中で出来る活動がないかと調べる中で、東京にある「NPO法人JIYU（以下JIYU）」が「使用できるけど使用していない文房具」などの寄付を募り、集まった文房具をカンボジアやベトナムなどの発展途上国に送り届けている活動があることを知り、この取組に参加することにしました。

具体的にどのように取り組むかを考えるため、「JIYU」とメールや電話で連携をとり、東京の事務局と仁方をズーム（Zoom）でつないで、実際に役員の方から、活動の詳細や発展途上国の現状について講義をして頂く機会を設けました。



NPO法人JIYUからZoomで援助の話を聞く

その講義で、生徒たちは「支援先であるベトナムの都市部を除いて学費が払えない家庭の子ども達は、家業の農業を継いで生計を立てており、最終学歴が小学校卒業である人が多い」といった発展途上国の

過酷な現状を知り、この文房具寄付活動の意義を深く理解することが出来ました。

そして後日、生徒朝会で代議員長が講義で学んだことを発表し、文房具回収ボランティアの呼びかけを行いました。文房具の回収は朝の登校時間帯に3日間行い、段ボール2箱分の文房具を回収することが出来ました。回収した文房具は種類ごとに選別し、郵送で「J I Y U」に送り、無事この文房具回収ボランティアの取り組みは成功しました。



ボランティアによる文房具回収

この取り組みでは、まさに「気づき・考え・実行する」を実践することが出来ました。その中でも特に「考え」の場面では、このボランティアの全体計画を立てていくだけでなく、生徒が直接「J I Y U」の方から話を聞くことで、活動の目的やニーズを深

く理解することができ、良かったと思っています。これからも仁方中学校では、生徒と教師が協力して、生徒一人一人が主体的に「気づき・考え・実行する」ことが出来るJRC活動を展開していきたいと思えます。



後日送られてきた感謝状

広島みらい創生高等学校ボランティア部のJRC活動について 広島市立広島みらい創生高等学校

教諭 瀨本 貴司



広島みらい創生高等学校は平成30年4月に広島市域の定時制高校と通信制高校を再編整備する形で開校した。生徒

の多様なニーズに対応するべく、定時制課程の平日登校コースと、通信制課程の通信教育コースの2つの課程をもつ、新しいタイプの高等学校である。この度、貴重な機会を頂いたので、本校ボランティア

部の活動を紹介させていただきたいと思う。

ボランティア部は開校年度に同好会としてスタートした。私は時を同じくして本校に着任し、同好会の立ち上げから関わることができた。これまで私は中学校でのJRC活動を進めてきたが、同好会として新規にJRCに加盟することとし、高等学校でのJRC活動にシフトすることになった。翌年度には同好会から部に昇格し、令和3年度の部員数は13名である。

新規に部活動を立ち上げ、JRC活動を展開していくことは、私自身がこれまでの経験で実感してきた青少年赤十字の良さを、複数の顧問や部員たちに伝え、理解してもらう過程に他ならない。幸い、ボランティア部としての加盟であり、奉仕にかかわる活動に少なからず関心のある生徒が集まっていることから、献血ボランティアや募金活動などへの参加呼びかけに対する反応は良い。実際にJRCの奉仕活動に参加することで、赤十字と青少年赤十字の理念や良さが、部員たちに伝わっているのではないかと感じている。しかし、昨年度からのコロナウイルス感染症の影響もあり、十分な活動ができていないと言えない。まだまだ手探りの状態が続いている。部のモットーは「できるときにできることを」で、JRC活動だけでなく、広島市社会福祉協議会とも連携したボランティア活動も行っている。これまでに取り組んできた活動のうち、特徴的な3つを紹介したい。

1つ目は、毎年1回実施している「校内ミニトレセン」である。これは、私が令和元年の全国指導者トレセンに参加した際、そのワークショップで計画したものである。土曜日の午前中を使って実施し、

プログラム内容は、講義「赤十字と青少年赤十字」、グループワーク、奉仕活動の実践、の3つで、3年連続で開催している。グループワークは、防災教材「まもるいのちひろめるぼうさい」を利用し、防災学習もさることながら、全員が顔を合わせる機会が少ないこの部においては、人間関係作りにも役立っている。



校内ミニトレセンでのグループワーク

2つ目は、ちよこつとボランティア(略して「ちよボラ」)で、部員個々が身の回りの小さなニーズに気付いたときに、短時間で解決できるものについて行動に移すものである。実施したことは記録用紙に記入して蓄積しておくとともに、部のミーティング

グで共有することとしている。具体的には、教室の机の整頓や簡単な清掃、教師の授業準備や片付けの手伝いなどである。部のモットーを最も体現している活動である。



ちよ★ボラ カード

実施日: 令和 年 月 日 ()

組 氏名 _____ 時間 [: ~ :]

場所: _____

内容

顧問確認印

ちよこつとボランティア

3つ目は、令和2年8月末に実施した豪雨災害義援金募金活動で、令和2年7月豪雨災害の支援のため、生徒会執行部と合同で5日間実施し、5万円あまりの募金を広島県支部に持参することができた。想像以上に協力する生徒が多く、呼びかけを行った部員たちも、自分たちの活動が被災された方々の支援に繋がっている実感を持つことができた。

これら以外にも、NHK海外たすけあい募金並びに青年奉仕団主催のバザー協力のほか、献血ボランティア活動、夏のトレセンや広島県大会など、他校の活動を知り、JRCメンバーと交流する機会にも広く参加し、部員の活動意欲の維持向上に努めている

る。また校内では、不定期ではあるが、花壇の整備による新入生歓迎準備や学校説明会での案内補助なども行っている。



花壇の整備

一方で課題もある。時間割上、毎日登校する必要のない部員もいるため、部員全員が揃うことが難しい。隔週火曜日の昼休憩に実施するミーティングや、Google Classroomアプリケーションで、情報の共有に努めているが、即時性に劣るため、行事等の参加希望を募るときなどに難しさを感じている。また、私個人の課題は、私以外JRCの活動をリードできる顧問がいけない点である。近い将来私が転勤することになったとき、JRC活動を引き継いでもらえるよう、顧問の先生方にもJRC活動に多く関わっていただくことが来年度の私の役割である。

最後に、ボランティア部に入部して、JRC活動に参加するようになり、それまで苦手だった他者と

の関わりを持てるようになった生徒がいる。これも、JRC活動によってもたらされた成果だと思う。赤十字を通じ、他者と、ひいては世界とつながる入口になるという意味でも、様々な背景を持つ多様な生徒が在籍する本校でJRC活動に取り組み意義は大きいと考えている。これからも、部員とともに、「奉仕」の精神で活動を続けていきたい。

広島県立熊野高等学校JRC部の活動について

教諭 前田聡生



みなさんこんにちは。熊野高校JRC部です。今年度の活動について報告します。昨年度はコロナ禍で4月中旬から休校になったこともあり、部員が集まりませんでした。3年生だけでのクラブ紹介でしたが、1年生を3人迎えることができました。現在8名で明るく、真面目に、楽しく活動をしています。

校内の活動では、ペットボトルのキャップ回収と仕分け作業、コンタクトレンズのケース回収、校外の清掃を行ってきました。また、美化委員と協力して、校内の花壇の花の植え替えを行いました。これらの活動を報告する場面があまりなかったのですが、今年度は熊高祭（文化祭）で部活動紹介として全校生徒の前で発表することができました。パワーポイントの準備や、発表原稿の作成、発表者の役割分担など、自分たちで計画し、やり遂げることが

きました。発表後は全員がよかった、と述べるなどよい経験値となりました。



ペットボトル仕分け

また、10月に行われたオープンスクールでは、中学生に自分たちの活動を発表する機会がありました。先輩として丁寧によく活動を紹介して、熊野高校の魅力として語ることができました。来年度入学して是非JRC部に入学してほしい、との思いをしっかりと伝えることが出来ました。

JRCの活動としてやはり大きな意味を持つのが、校外での活動だと思います。他校の生徒と交流の出来る活動はとても楽しく、意義深いものがあります。

青少年赤十字広島県高等学校協議会では、各学期に総会があり、その委員として2名の生徒が活躍しています。その一番の活躍する場面は、街頭での献血キャンペーンです。今年度は夏と冬の二度、「イオンモール広島府中」で献血協力の呼び掛けを行いました。自主参加ということでもどれくらい来てくれるかな、と少し心配をしていましたが、夏には3人、冬は6人の生徒が参加してくれました。他校の生徒とグループになって、指定された場所で呼び掛けました。



熊高祭でのJRC部のプレゼンテーション



「イオンモール広島府中」での献血キャンペーン

夏はモールの中と入り口付近ということで場所を順番に替えて行いました。暑い一日でしたが、モールの中の時は涼しくて、特に元気が出ました。冬はコロナ感染症が拡大をみせており、入り口付近限定ということになりました。寒い一日でしたが、各グループで工夫して、一生懸命呼び掛けをしました。夏、冬とも午前中は20名くらい献血者がいたそうです。呼びかけが始まる午後からの目標は40名です。ここで高校生たちの活躍があります。高校生が呼び掛けることでかなりのお客さんが関心を示してくれ

ました。どちらとも午後は、60名近くの方に献血バスに来ていただくことができました。日赤の方にも「高校生がいてくれることで、人が集まります。」と嬉しい言葉をいただきました。

呼び掛けは最初、なかなか声が出てきません。恥ずかしいと思いつつも、少しずつ声を出している、と、10分ぐらいで自然と大きな声になってきました。他校の生徒とも打ち解けて、いろいろ考え、工夫した呼び掛けをすることができ、これもかなりの経験値となりました。

今年度はトレーニンングセンターにも参加する機会がありました。いつもは泊を伴う活動なのでなかなか参加できませんでしたが、オンライン開催ということで学校に4名の生徒が集まりました。総勢38名の生徒が参加しました。その中で赤十字の精神と活動の理解や主体的に行動できる力を学びました。特にリーダーシップについて講義を聞き、意見交換を行いました。最初はなりたくないと考えていた生徒もいましたが、リーダーの役割を知る中で、進んでリーダーになり、学校の行事などで生かしたい、と考えるようになりました。ボランティアの心得も知ることができた、との意見もありました。

様々な行事に参加し、JRC部員としてもっともっと活躍したい、活動を知ってもらいたいと考えるようになりました。これまでの経験値を社会に出てしっかり生かすことができると確信しています。小さな小さな活動ですが、少しでも人の役に立てたらいいな、と日々考えることができるようになりました。ここまで私たちの活動をお話してきました。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

広島県小学校トレセン・オンライン開催への挑戦

小学校指導スタッフ

山県郡安芸太田町立筒賀小学校

教諭 西廣直明



新時代「令和」は新型コロナウイルスの感染拡大により、漠然とした不安や懸念とともに

にスタートしました。広島県小学校トレーニンングセンターにおいては令和元年度の参集型による実施を最後に、翌令和2年度は中止、本年度（令和3年度）も実施が危ぶまれる状態でした。本年度最初のスタッフ会議はオンラインで実施されました。指導スタッフが所属する各校の実態を交流していく中で「JRCの活動が何もできていない」「学校現場においてJRCの考え方が少しずつ薄れていくことに懸念を感じる」といった、焦りや不安の声が上がりました。また、2年連続中止とした場合、子供たちが主体的にJRCについて学ぶ場として脈々と受け継がれてきたトレセンの実施に、2年もの空白が生じることにしても懸念の声が出されました。

こうした中、急速に進んできたのが教育のICT化です。広島県では児童一人に一台ずつタブレット端末が配布され、感染拡大による一斉休校のような措置がいつ何時実施されても子供たちの学ぶ機会を損なわないように、多様な活用方法を模索しています。授業のオンライン化もその一つと言えます。そこで、小学校でもオンラインを活用したトレセンを実施できないだろうかという検討が始まりました。中高生がオンラインを活用してJRC活動を行って

いるという情報はいくつかありましたが、同様の形で実施すると、小学生の子供たちにとっては負担が大きいことが予測できます。そのため、プログラムについてはあきらめなくてはならない部分も出てくるでしょう。でも、それでもいい。できることをやる。そして、子供たちの学びを止めない。これが私たち小学校指導スタッフの選択でした。

トレセンのオンライン開催を目指すにあたり、その準備段階で乗り越えなくてはならなかった大きな壁が二つあります。

一つ目は「セキュリティの壁」です。児童一人一人には各市町教育委員会から一人一台端末とともに個人アカウントが配布されています。個人アカウントとはオンライン上での住所氏名にあたる個人情報そのものであり、このアカウントから無闇に外部のアカウントと接触できない仕組みになっています。

つまりオンライン上で市町を超えた子供たちの集まりを想定した場合、A市町のアカウントを持つ子供たちとB市町のアカウントを持つ子供たちが接触すること自体、そもそも不可能ということになってしまふのです。従ってこのアクセス方法については事前に様々な検討を行い、試行錯誤を繰り返しました。

どの方法ならば参加が可能になるのか、スタッフ同士や支部の担当者、また、市町教育委員会や学校管理職の先生方とも協議した結果、児童が個人アカウントを使わず、ゲストとして参加できる方法に辿り着きました。開催にあたってはマイクロソフトTEAMSを使用することとしました。

二つ目の壁は「プログラム・運営の壁」です。今回のトレセンは参集型・体験型とは異なる質を持つため、まったく同じことはできない。でも、少しでも

も開催の意義や価値を参集型に近づけたい。



ヘッドセットつけて個別に学ぶ

そのためには、何を、どのように組むべきか、何をあきらめるべきか、悩みながら全体プログラムを作成しました。また、各プログラムを担当するスタッフの先生方も、オンライン上では何ができて何ができないのかを見極め、自分のプログラムを再構成する必要がありました。事前に何度か接続テストを繰り返し、その都度どんなプログラムをやるうとしていくのか、それが可能かどうかという確認を行いました。さらに掲示板はどうするのか、子供たちの自主的・自律的生活をどう支援するかについても課題

でした。また、子供たちは各所属校に参集し、そこからの参加になるため、当日、離れた会場の先生方と、どう連携を取るかも検討が必要でした。



各校で救急法を試みる児童

長年経験のある指導スタッフの先生でさえ、「こんなトレセンは初めてだ」と目を丸くするほど、すべてがこれまで通りにはいかない、まさに手探り状態の中で、令和3年8月4日、全国でも初となる小学校オンライントレセンの実施に漕ぎ着けました。全体プログラムは次頁図1の通りです。参集型では国際理解プログラムや選択学習、フィールドワークなど、トレセンならではのプログラムもあります。今回は一日のみという時間的制約、さらに、オンラインという特殊な開催形態であることを考慮し、

【図1】R3小学校オンライントレセンプログラム

8:30	Teams 入室確認
9:00	開講式 ・はじめのことば ・支部挨拶 ・誓いの言葉(代表児童) ・♪「空は世界へ」動画共有 ・スタッフ紹介
9:15	オリエンテーション ・日程説明 ・トレセンのねらい ・Teamsの扱い方 ・オンラインでの受講・参加のしかた
9:45	アイスブレイキング ・オンラインでできるレク
10:30	青少年赤十字について ・誕生 ・考え方 ・活動
11:30	ホームルーム【ブレイクアウト①】 ・自己紹介 ・youはなぜここに?
12:00	昼食(オフライン) ・各会場校で実施
12:45	Teams 入室確認
13:00	自分でできるJRC ～ボランティアサーブスについて～ ・VSカード
13:45	ホームルーム【ブレイクアウト②】 ・計画の紹介、共有
14:15	「救う」を知ろう ～赤十字の防災や救急法～
15:30	学校でできるJRC ～自分の学校で実践しよう～ ・実践紹介 ・計画 ・計画
16:45	閉講式 ・支部挨拶 ・みんな一言 ・退室
17:00	Teams 会議終了

実施を見送りました。また、掲示板についてはプログラムの間の時間に支部の方で画面共有していただき、次のプログラムの開始時刻や連絡事項などを表示していただく形で対応しました。さらに、当日のプログラム進行に伴う時間のずれや子供たちの接続状況、接続トラブル等についてはSNSを使ってスタッフのグループを立ち上げ、全スタッフで共有しながら対応していきました。

こうしてスタッフサイドとしてはバタバタと過ぎ、振り返ってみれば反省も、改善すべき点も多い1日ではありましたが、たとえオンラインであっても子供たちが各プログラムに主体的に参加し、普段ふれあうことのない異校間の子供たち同士で対話し、考えを交流することで、楽しみながら自己の学びにつなげようと、いきいきと活動している姿は印象的でした。

事後アンケートの結果を見ても多くの参加児童が「JRCを学ぶことには価値がある」「参加してよ

かった」と感じてくれており、私たちの選択は間違っていなかったと感じさせてくれました。どのような形であれ、交流することに意義がある。交流して初めて得られる学びがある。残すべきものはここにあると改めて実感しました。

今回の実践では、改めてトレセンの形を見直す機会となりました。本来は参集型・体験型がいい。その場の空気感や緊張感、実感を伴った活動による達成感があり、学びのサイズ感が圧倒的に違います。でも、いざとなったらこんなやり方もある。ある種の道筋を示すことにはつながったと思っています。工夫次第で他にも色々なやり方がある…のかも知れませんが、一日も早く、本来の参集型・体験型で実施できる日が戻ってくることを願ってやみません。

今回、苦しい状況の中、熱い思いでトレセン開催にご協力いただいた指導スタッフの先生方、各会場校の先生方、ご協力いただいた支部の皆さん、参加してくれた熊野第一小、熊野第四小、筒賀小の子供たちに、心から感謝を込めて…。

オンラインによる高等学校トレーニ ングセンターについて

広島県立安芸高等学校 前平芳延

新型コロナウイルスの猛威は令和3年度も衰えず、何度かの波によってさまざまな計画が修正を余儀なくされた1年だった。青少年赤十字活動もその影響を免れることはできず、その中核的な位置づけのトレーニングセンターが開催できるか危ぶまれた。高等学校は当初、オンラインによる講義と参集しての実技講習やワークショップで構成されたハイブリッド型の

内容を検討していたが、第5波の影響が広がる中、中止か、オンラインのみでの実施かの選択を迫られた。十分な準備期間もなく、見通しが持てたわけではないが、2年連続で中止となって生徒にとっての参加機会を失ってしまうことを危惧し、1日のみのオンライン開催を選択した。



学校で講義を聞いている様子

当初からオンラインを想定して綿密に計画された小学校と違い、スタッフも参集が期待できないなか、賛助奉仕団の日高先生、宮島工業高校の江上先生の



講師の質問を紙に書いて回答する様子

協力を受け、何とか開催につなげることができた。当初のハイブリット開催で参加を申し込んでいた学校がすべて参加して下さったことにはほっとした。結果的に8校35名の生徒の皆さんの参加となった。内容的には、開講式・オリエンテーションの後、「赤十字の精神と青少年赤十字」の講義を私が行った。オンラインの講義は学校でのコロナ対応で経験があるが、赤十字についての理解が学校によってまちまちであり、赤十字が用意していただいている教材を活用させていただいた。参加生徒は真剣に参加しようとしている生徒たちではあるので、オンラインであっても、簡単な作業を取り入れるだけでも、理解を深めることにつながることは普段のオンライン授業と同様である。

「防災講座」では、実際に赤十字が関わった西日本豪雨（平成30年7月）をはじめとした災害の救護活動の様子や、それらの過去の災害からの教訓などについて講義していただいた。また生徒たちに普段どのような「備え」をしているかを問いかけるなど、自分のこととして参加者が考えを深めることができるとなっていた。最後に日高先生による「リーダーシップ」の講義は、各学校の生徒の積極的な参加を促す形で行われ、画面越しに自分の意見を発表し、交流する姿がみられた。

スタッフの先生方、支部職員の皆様、そして何より参加した各学校の生徒たち、顧問の先生方の協力で一度は途切れ（かけ）たトレセンを次年度につなげることができ、ここでの経験から県大会（県総文）でのオンライン開催に今度は生徒が司会・運営など主体的にかかわる形を作れたのは大きな意義があったと考えられる。

ただし今回のトレセンは、通常行われている宿泊を伴って寝食を共にして、講義以外の場面における「気づき」「考え」「実行する」経験の積み重ねが自然にできるものと違って、画面越しに講義部分を中心に進行するものであったため、生徒・スタッフ同士の赤十字メンバーとしての強いつながりを生んだり、朝の集いやV・Sの実践、高校トレセンの醍醐味でもあった調査型フィールドワークなどを経験したりすることができなかった。このような効果や内容を準備するためには講義部分以外のオンラインでもできるアイスブレイクの工夫や、HR活動（全体のオンラインと並行してHRのオンラインを行き来できる工夫）などを取り入れる必要もあるかもしれない。

令和4年度には、従来型の参集タイプのトレセンを復活させたいが、参集との組合せを含め、今後オンラインでのトレセンの在り方について、各学校の先生方と協力して取り組んでいきたい。



11月13日に令和3年度広島県青少年赤十字指導者研修会は、学校で青少年赤十字（JRC: Junior Red Cross）を担当される先生方を対象に行われます。特に指導者としての経験の浅い先生方を中心に行われます。赤十字の精神や青少年赤十字の活動のあり方、進め方などを中心に研修します。参加者の先生方が、それぞれの現場で、青少年赤十字を活用した教育を推進できることが目的です。

令和3年度広島県青少年赤十字指導者研修会（スタッフ）

賛助奉仕団副委員長 山中章敬

昨年度は、コロナ禍で開催されませんでした。指導者の育成は、青少年赤十字の普及のためには欠かせないものです。今回の研修会は、コロナ感染を避けるため、オンラインでプログラムを絞って開催されました。スタッフを含め参加者のほとんどが、オンライン研修の経験がない中で行われました。戸惑いもありましたが、オンライン経験の豊富な県支部の皆さんのお陰で、予定通り研修を進めることができました。

私は、「赤十字と青少年赤十字」（基礎理論）を担当しました。青少年赤十字は、「苦しんでいる人を見たら何とかしてあげたい」という誰もが持っている優しさや思いやりの心を育て、実際に行動（赤十字の精神の具現化）することのできる幼児・児童・生徒の育成を目的としていること。青少年赤十字の実践目標や「気づき、考え、実行する」という態度目標は、青少年赤十字の指導者が長年活動を通して培い大切にしてきたものであること。そして、その活動は、学習指導要領の「生きる力」や「対話的で深い学び」の推進などと重なり教育の根幹をなすものであること。赤十字の歴史を通して赤十字精神の普及と青少年赤十字を活用した教育が重要であることなど。以上のことが少しでも理解できるように研修を進めていきました。

短時間の中で内容が多く大事な研修なので、受講生にとっては消化しきれない点があったと思いますが、その点は、今後受講生自身で研修内容を深めていただければ幸いです。

今回の研修で、スタッフの先生方や県支部の皆様から、そして参加者から多くを学ぶことができました。対面式と違って、受講者の表情や反応など理解の度合いなどわかりにくく、やりにくい面などありました。他のスタッフの先生がたのプロプログラムでは、資料を送ったり、班分けをして、双方向での対話をしながらグループワークをしたり、共同作業をしたりすることで研修が進められました。研修の内容もですが、オンライン活用の多様な使い方を経験させていただきました。



講義している様子

オンライン活用能力の未熟さもあり一堂での研修会には及ばないところもありましたが、研修会の目的に加えオンラインの多様な活用や有用性を知ることができたと思います。今回、オンライン研修会ということで参加できなかった先生方も、参加して経験してみれ多くのことを学べたと思います。次の機会には是非とも参加していただきたいと強く思いました。

最後に、参加者の皆さんや準備を下さった県支部の皆さんスタッフの先生方に感謝します。今後の青少年赤十字での活躍を期待します。

（赤十字地域奉仕団の活動）
「安芸郡府中町防災研究会赤十字奉仕団」の活動について
 委員長 篠永廣



防災の知識向上のため、住民の皆様と一緒に話し合いながら、防災時の知識を少しでも理解できれば幸いと活動してまいりました。私達ボランティアの赤十字奉仕団は、住民の皆様の防災意識を高めると共に普段から地域の中で、お互いに助け合う関係を築き、災害時に援護を必要とする子供・高齢者・障害者等の支援ができる活動を目指しています。

日頃から地域の皆様に「自分の命は、自分で守る」ために防災の知識を身に付ける指導をしています。また、広島県の「広島県自主防災アドバイザー登録証」名義で平成29年4月より活動中です。

令和元年度赤十字モデル奉仕団の活動報告
 （令和元年度～令和2年3月31日）

- 1 活動の概要
- 定例会議月1回年間12回
- 出前講座
 - 学校関係、各地域の自主防災会等に支援活動を行いました。（活動25件・研修会参加9件）
- 研修会参加
 - 自主防災リーダー研修会、赤十字関係研修会（年間7回）
- 講演会の企画
 - 町民のための研修会として「府中町災害に学ぶ講演会」を企画し、2月に開催しました。

2 活動内容

①講演会の開催

演題「自然災害にやあ巻き込まれとおない」

～ほいじゃあどがーにしたらええん～

講師 玖保 陽子 広島県自主防災アドバイザー

日時 令和2年2月22日 (防災士・気象予報士)

場所 くすのきプラザ1階ギャラリ

参加者 130名

平成30年の広島豪雨災害、当町では榎川の氾濫災害に遭いました。住民として今後多発する自然災害や南海トラフ地震の津波などに対処すべき日頃の生活を再確認し災害を回避する心得や、自然災害の種類・災害防止対策、注意報発令方法、避難所開設方法、危機管理能力の養い方等に、きめ細かく話をし、頂き、町長、議長をはじめ住民の方々に好評でした。

②府中町みくまり峡復興イベント

(主催府中町・社協)



復興イベント (炊き出し担当)

府中町榎川氾濫災害の上流で、みくまり峡のイベントは7月27日、参加者数400名余。本ボランティア赤十字奉仕団は、炊き出しを担当参加しました。

炊出しはハイゼックス使用のため日本赤十字広島県支部に協力をお願いしました。ハイゼックス炊出し250食のカレーを作り、喜んで頂きました。

③日本赤十字社広島支部関係の行事への参加

・ひろしまフワワーフェスティバル(5月3日14名)

・赤十字広場に参加(3日～4日で5名)

・広島県赤十字ボランティア研修会(6月23日3名参加)

・赤十字広島看護大学で傷病者役・避難者役の実践体験等に4名参加(7月2～4日)

・青少年赤十字広島県大会(10月26日、3名参加)

・「赤十字フェスタひろしま2019」

9月14日炊出しに参加100食(8名参加)

④学校関係

広島県は「みんなで減災・県民総ぐるみ運動」として、県民一人一人が災害から命を守るために、

地域での適切な活動を推進しています。

普段から災害に備えるための行動力を身に付け、「自分の命は自分で守る・自分たちの地域は自分たちで守る」ため、地域力を高める活動を、小学校の生徒対象に私達グループは指導しております。

災害時の府中町指定避難場所に指定されている小学校の生徒に、災害の知識を少しでも理解し習得してもらえれば、地域住民の減災活動に役立つと考えています。若い人の考え方と大人の考えの共有が大切です。災害には正解はありませんので事前対策としていろいろな事を体験すれば、「減災」につながります。

地域住民と学校との取組行事が可能になれば幸いです。

☆防災体験教室として

非常食の炊出し体験、AED取扱体験学習を中心として、マスク、新聞紙スリッパ、雨カッパ作り、紙皿等や他の防災教材を身に付けられるように5年生を中心に活動しています。現在府中町の小学校5校中3校が防災学習会を実施し応援しています。

青少年赤十字加盟校の3校は、私達の活動地域です。ので支援活動に努め、最初に府中中学校の炊出し訓練の体験に参加し指導しました。

○府中小学校防災学習会(7月10日) 5年生131名。新聞紙のスリッパ作り、マスク作り等、防災教材 140部配布、AED体験



府中小学校・防災学習会

○府中中小学校防災キャンプ(10月2日) 5年生120名。炊出し訓練・雨カッパ作り、ハイゼックス

クス袋カレーフルーツ。女性会・PTAより20名
応援活動。非常食炊出し体験で防災意識を身に付
け、互いに協力し自然災害等に対応する力を高め
る。



府中南小学校・雨カップづくり

- 府中中央小学校防災イベント（11月1日）5年生
112名。炊出し体験。AED体験等。炊出しは、
ハイゼックス袋で指導AED体験は日本赤十字広
島支部の講師に依頼。生徒達は炊き出しの話を
真面目に聞き、自分の食べ物を作りました。
- ⑤その他の活動として
- 南・北の交流センターで、小学生防災教室・（土
曜日）
- 町内会各自主防災会等で、非常食炊出し体験指導
10件を行いました。



府中中央小学校・ハイゼックス炊き出し

（団員だより） 青少年赤十字賛助奉仕団に参加して



幹事 下野 玲子

今年度、前幹事の采谷先生か
ら会計を引き継いだ下野です。
賛助会の会計を担当した4月、
まず会費を管理するための手順
を理解することに四苦八苦しました。長年の間、先
輩の先生方がやってこられた事に改めて感謝いたし
ました。

退職して久しぶりの支部は懐かしく、現職の時、
夏のトレセンで知恵を絞り出して考えたプログラム
やあれこれ工夫を凝らした表彰の様子など思い出さ

れました。中でもJRC部員と考えた急な雨降りの
ための「貸し傘企画」や放課後、校内の食堂の割り
箸を毎日洗って干し、紙と交換する活動、モンゴル
に高校生が3年間大切に使用したジャージを送る活
動、阪神淡路大震災からそれに続く災害がある度
に何が出来るか何が必要か、生徒と教員が一緒になっ
て考えた日々は今でも私の大切な財産です。
この数年はコロナという今まで経験したことがな
い社会状況ですが、赤十字の活動は状況が大変でも
そこから何が出来るかに「気づいて」ゆく活動です。
学校という場を持たない今、賛助会の活動を通して
また、自分が住んでいる場所でも「赤十字の精神」
を忘れず活動していきたいと思っています。

JRCに出会い50年を越えました 賛助奉仕団 副委員長 野田 崇



○赤十字との出会い

1969年23才の7月先輩の
JRC指導者のN先生から、
「JRC指導者トレセンがある
から行ってこい」と指令された
のです。赤十字の「せ」の字も理解していなかった
のに、気楽に「はい」と返事をしてしまいました。
7月末、「キャンプ」に行くぐらいの気分で大和
町のトレーニングセンターに到着しました。

「受付・開講式・オリエンテーション」「ん」な
んだか変と戸惑いました。「指示命令はありません・
必要な連絡は掲示板を見てください・・・」と。
講義があり赤十字やJRCのイロハを学ぶ講習会
と思い込んでいたわたしは、「主体的に学び、行動

してください」に「なんだこりゃ・・・」と思っ
てしまいました。

プログラムが進行するにつれ、「赤十字は主体的・
自主的・自律的・自立的組織」と理解し、個性的指
導者とふれあうことでトレセンを楽しみわたしがい
ました。

指導者トレセンが終わると帰る予定でしたが、続
く小・中・高のトレセンに居残り2週間を大和町で
すごしてしまいました。

JRC指導者の一員に加わったわたしに翌年6月、
県支部から「8月に御殿場の東山荘で全国指導者ト
レセンがあるので、参加しないか」とオファーがあ
り、校長の了解を得て参加の返事をしたのです。

東山荘での全国指導者トレセンは、これまた個性
的な参加者と個性的な指導者との出会いがあつて、
刺激的な6日間になりました。

赤十字が「赤十字は死と苦痛とたたかう。赤十字
はいかなるときも人間が人間らしく取り扱われるこ
とを要求する」と人道を定義して世界的組織である
ことを、深く理解したのでした。

赤十字の理想と現実のギャップを批判する人もい
ますが、理想と現実のギャップを埋めることこそ赤
十字に課せられた命題と理解しています。

その頃は、高度経済成長期であり「教員をやめて
内の会社にこんか」と誘いもあり少し迷っていた時
期でしたが、赤十字との出会いが「教員を続ける」
決意をするきっかけになりました。

トレセンスタッフの持ち込む様々な教育技法が、
わたしの視野を広げる刺激になりました。

ノンデレ、カウンセリング、スクールカウセリン
グ、バズセッション、ロープレイ、KJ法などなど

多数です。(つづく)

令和3年度青少年赤十字賛助奉仕団 活動報告



賛助奉仕団幹事長

寺田宣文

○会議等

4月16日 第1回役員会、総会

7月17日 全国青少年赤十字賛助奉仕団総会
(オンライン形式)

8月10日 高校トレニングセンター
(スタッフ参加、オンライン形式)

10月 第5ブロック青少年赤十字賛助奉仕団
協議会(書面審議)

11月13日 指導者トレニングセンター
(スタッフ参加、オンライン形式)

11月24日 第1回機関誌編集委員会

11月27日 青少年赤十字広島県大会
(オンライン形式)

○登録式出席

4月9日 海田町立海田中学校
(出席 山中章敬、支部職員2名)

4月12日 海田町立海田西中学校
(出席 山中章敬、支部職員2名)

4月21日 府中町立府中中学校
(出席 山中章敬、支部職員2名)

4月27日 広島市立五月が丘中学校
(出席 山中章敬、支部職員2名)

令和2年度広島県賛助奉仕団役員

委員長 日高敬司

副委員長 河戸靖子、野田 崇

幹事長 寺田宣文

幹事 下野玲子

監事 采谷宣子、吉丸朝美

顧問 光本涼子、塚本晃史

田中 博、平越幸男

曾山和彦、水野善親

編集後記

この2年間はコロナウイルスの関係で日本社会全
体で活動を休止が続きました。しかし、JRC活
動は工夫して実践にあたっておられ、当号は寄稿が
大変多く増頁となりました。

次年度は、中国・四国ブロック協議会が広島で開
催されます。団員の皆さんこそぞつての参加で盛り上
げましょう。

○編集委員

日高敬司、河戸靖子、野田 崇、采谷宣子
山中章敬、寺田宣文

令和2年度青少年赤十字加盟校数

(単位:園、所、校)

校種	全国		広島県	
	加盟校数	加盟率	加盟校数	加盟率
幼稚園	870		8	
保育園	939		26	
小学校	7,063	36.2%	107	22.5%
中学校	3,575	34.6%	84	30.9%
高等学校	1,856	37.6%	42	32.1%
特別支援校	199	17.3%	5	27.8%
合計	14,502	35.3%	272	26.6%

令和2年度青少年赤十字加盟概況
(加盟校数・加盟率)
(この統計は、確定数によるため1年遅れとなっています)

※加盟校数は、「令和2年度青少年赤十字の概況」から掲載

令和3年度青少年赤十字事業報告

広島県支部主催行事

月	日	事業	対象	場所	備考
4	16	指導者協議会総会・役員会・常任委員会	加盟校長、指導者	日赤支部	総会 33名 役員会 7名 常任委員会 3名
6	26	指導者研修会	指導者	日赤支部	延期(新型コロナウイルス感染症のため)
7	-	日・韓交流事業(広島受入)	中・高校生、指導者	広島県内	中止(新型コロナウイルス感染症のため)
7	-	国際交流プログラム	中・高校生、指導者	広島県内	中止(")
8	-	日・韓交流事業(韓国派遣)	中・高校生、指導者	韓国	中止(")
8	4	広島県小学校トレーニング・センター	小学生	各参加者所属校	オンライン開催 児童23名 指導者6名
8	10~11	広島県中学校トレーニング・センター	中学生	広島県情報プラザ	中止(新型コロナウイルス感染症のため)
8	10	広島県高等学校トレーニング・センター	高校生	日赤支部及び各参加者所属校	オンライン開催 生徒35名 指導者13名
9	17	指導者協議会常任委員会	常任委員	日赤支部	オンライン開催 常任委員8名
11	1	指導者協議会役員会	役員	日赤支部	オンライン開催 役員15名
11	13	指導者研修会	指導者	日赤支部	オンライン開催 参加者 12名 指導者 7名
11	27	広島県大会	メンバー、指導者等	日赤支部	オンライン開催 参加者:58名(加盟校48名 賛助奉仕団2名 教育委員会 2名 職員6名)
1	4~	青少年赤十字創設100周年特別事業 「100万羽おとりづるプロジェクト」	メンバー、指導者等		令和4年3月25日時点:12校参加中 (高校4校、中学校4校、小学校4校)
2	10	研究会	指導主事、指導者	日赤支部	オンライン開催 参加者 34名(参加者29名、主催者代表1)
3	1	指導者協議会常任委員会	指導者	日赤支部	オンライン開催 常任委員6名
3	-	指導者協議会役員会	加盟校長、指導者	日赤支部	文書審議

本社・5ブロック主催行事

月	日	事業	対象	場所	備考
6	5	トレセン指導者養成講習会	指導者	日赤本社(東京都港区)	オンライン開催
6	29	全国指導者協議会総会・研修会	会長	日赤本社(東京都港区)	オンライン開催 指導者協議会 光本 副会長出席
7	17	全国賛助奉仕団協議会総会	賛助奉仕団	日赤本社(東京都港区)	オンライン開催 賛助奉仕団 日高 委員長出席
9	30	指導主事対象研究会	指導主事	日赤本社(東京都港区)	オンライン開催 広島県教育委員会指導主事:1名
9	-	58青少年赤十字賛助奉仕団協議会・研修会	賛助奉仕団	香川県支部	書面審議
10	22	第5ブロック指導者協議会会長並びに 事務担当者会議	会長、事務担当者	高知県支部	オンライン開催 指導者協議会 三宅 会長出席
12	25~26	スタディー・プログラム	中・高校生	日赤本社(東京都港区)	オンライン開催 生徒 8名 指導者 5名